

## 古賀志山の三瀧

古賀志山の中腹には三つの瀧がある。<sup>おたき</sup>男瀧、<sup>めたき</sup>女瀧、<sup>あらかわたき</sup>荒沢瀧がそれである。いずれも古賀志山の<sup>みさき</sup>前衛岩壁に当る<sup>なかあてやま</sup>御崎、<sup>せなかあてやま</sup>中当山、<sup>だいにちやま</sup>背中当山、大日山の岩壁に寄り添っている。

### (1) 男瀧



男瀧は、「御崎」と「中当山」との岩壁の間に落ちる瀧である。源頭部は雨乞岩である。(ブログ参照)

現在、岩窟に瀧神社が祀られているが、明治6年以前までは瀧大権現と呼ばれていた。

男瀧に「雄瀧」の字を充てるのは間違いである。

なお「不動の滝」という呼称は元々存在しない。市観光課で立てた道標は事実誤認である。

元々から存在しない呼称は発信してほしくない。

『地誌編輯材料取調書河内郡古賀志村』によれば、「<sup>おたき</sup>男瀧」として

「高サ十間 巾五尺 村ノ子ノ方古賀志山ノ南面半腹 巖石溪間ヨリ瀉下ス 飛流一層一條ニシテ直下シ飛沫白綿ノ如ク下流ハ本 飛流一層一條ニシテ直下シ飛沫白綿ノ如ク下流ハ本村ノ川堀ニ流合ス」とある。

男瀧の水の流れは、下って女瀧の流れと合流し途中伏流している。

戦前まで、滝神社の前には、小さな修行小屋があり、里山伏の滝に打たれる光景があったが、朽ち落ちてしまった。また男瀧の滝壺には不動明王立像が奉納されていたが盗難に遭い存在していない。

瀧大権現は、日光山瀧尾大権現の勧請に由来する。

「古賀志山瀧尾大権現 …天仁元子年 日光山瀧尾大権現ヲ奉勧請 瀧尾大権現ト奉崇…」『家傳記三』とある。

但し、最初に日光山瀧尾大権現を勧請した地は、現在の岩窟ではない。  
前衛岩壁中当山の真下の窪地である。詳細は瀧神社の鞘堂壁面に掲示した説明板を参照されたい。

## (2) 女瀧

女瀧は、前衛岩壁の中当山と背中当山の間に落ちる瀧である。男瀧に比べて普段から水量は少ないが、淑やかに水を落とす様は、その名に恥じない。

『地誌編輯材料取調書河内郡古賀志村』によれば、「女瀧」として、  
「高サ六間 巾四尺 北方古賀志山南面山腹ノ巖石ノ間ヨリ発ス 飛流一條 外悉ク男瀧ニ同シ」とある。



この瀧下の岩窟に寛延元年（1748）、天狗宮を勧請された。『家傳記三』

「寛延元辰年 天狗之宮 女瀧へ新ニ建立…」とある。ところが明和2年（1765）、流木が落下し「天狗之宮」が壊れたため「背中当山」の弁天を祀る岩窟に遷座した。

詳細は、弁天三社の岩窟に設置した説明板を参照されたい。

瀧下には古賀志石に刻まれた不動明王立像がある。

なお、ブログ等にも、「雄瀧」とした記述を見受けるが間違いである。念のため

## (3) 荒沢瀧

荒沢瀧は、前衛岩壁である「大日山」と「背中当山」との間に落ちる二段の滝である。幽玄な雰囲気醸し出すこの瀧は、江戸期まで賑わった大日窟への参詣者が必ず立ち寄ったところであった。この地が、荒沢不動と呼ばれたのは、出羽三山の羽黒山奥の院荒沢寺こうたくじの構図を取り入れた名残である。大日窟には享保6年（1721）、弘蔵院宥清法印が出羽湯殿山に出向いて、「常火切火免許」

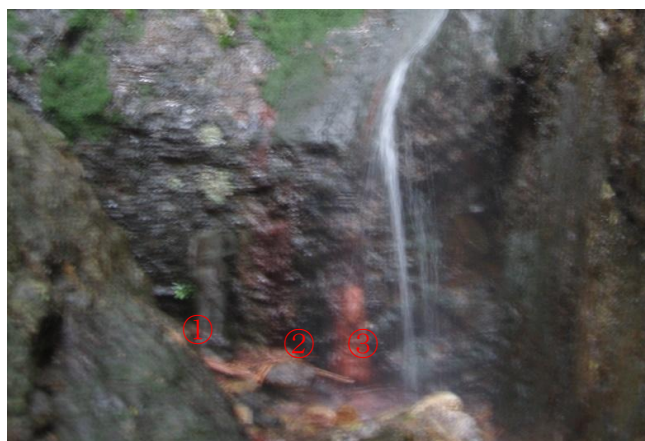
を受け、常火屋が建立された。この常火屋は、昭和廿年代まで存在したが、朽ち落ち取り壊された。大日窟前にあったのは「常火屋」であって、「大日堂」ではない。念のため



荒沢瀧は二段の滝である。下段の瀧壺には不動明王立像が奉納されている。この不動明王立像は「荒沢不動」と呼ばれ、天明二年（1782）には、これに至る

ひがしみちとおり  
「東道通り」が出来た。この道は廃道となっているが、往時の道形は残っている。大日窟に至る参道は、「湯殿大権現道」と「東道通り」と二つあったのである。尚、荒沢瀧の水は途中から伏流している。

『地誌編輯材料取調書河内郡古賀志村』によれば、「荒沢瀧」として、「高サ六間 巾七尺 村ノ子ノ方 古賀志山南面山腹ニアリ 巖石溪間ヨリ起流ス 飛流一層一條ニシテ直下ス 飛流綿ノ如ク下流ハ山礎ニ沿フテ自然尽ク 瀧下岩洞ノ中ニ石造ノ不動尊ヲ安置ス 身タケ三尺 其両脇ニ赤黒二童子ノ像ノ如キ天造物ニシテ人作ノモノト不見」とある。



荒沢瀧下段の瀧壺

- ①石造ノ不動尊
- ②黒童子
- ③赤童子